アヴィニョンまで

戦後 10 年間の近代プロヴァンス文学研究

石塚 出穂

序

昭和の最初の 20 年間、日本における近代プロヴァンス文学研究は見るべき成果をほとんど生まなかった[1]。しかし、第二次大戦終結後、状況は大きく変わる。早くも 1946 年にはプロヴァンス語プロヴァンス文学復興運動（フェリブリージュ）を論じた文章が文芸誌に載り、1948 年にはフレデリック・ミストラルと並ぶ 19 世紀プロヴァンスの代表的詩人テオドール・オーバネルを研究対象とした卒業論文が東京大学に提出される。また 1950 年代初頭には、フランス語学会や仏文学会で近代プロヴァンスの言語・文学に関する発表が行われるなど、あたかも戦前の遅れを取り戻そうとするかのように、この文学の研究は急速な伸びを示し始めたのである[2]。

第二次大戦後には、本国フランスにおいても、南仏の言語・文学の復権が進んでおり、1945 年、終戦直後にトゥールーズでオクシタン研究所[3]が設立されたのを皮切りに、1948 年にはソルボンヌ大学内プロヴァンス研究所[4]の創立、1951 年には地方語の教育を認めるデクソンヌ法[5]の可決、そして 1955 年のアヴィニョンにおける第一回南仏語南仏文学国際学会の開催、と各方面で具体的な成果が上がってきていた。これら一連の動きは戦前からの、あるいはミストラルら地方語の詩人達が復興運動に乗り出した 19 世紀以来の地方文化復権運動の結果であり、粘り強い努力と忍耐の末に勝ち取られたもの

---

[1] 拙稿「仏文学の周縁へ —昭和前期の近代プロヴァンス文学—」、『仏語仏文学研究』第 28 号、東京大学仏語仏文学研究会、2003 年 11 月、77-96 頁参照。

[2] 南仏文学関係の文献を探すにあたっては、主として以下の目録を参照した。原豊「南仏文学・語学・歴史関係文献目録」、『日仏図書館研究』第 6 号、1980 年；同「南仏文学・語学・歴史関係文献目録 補遺版 I」、『日仏図書館情報研究』第 17 号、1991 年。

[3] Institut d'Etudes Occitanes (I. E. O.).

[4] Institut d'Etudes Provençales. 現在はオック教育研究センター（Centre d'Enseignement et de Recherche d'Oc. 略称 CEROC）と改称されている。

[5] La Loi Deixonne.

であった。ちなみに、1955 年のアヴィニョンでの国際学会は、フェリブリージュ結成百周年にあたる 1954 年に企画されたものである。

戦後の日本の研究者たちがプロヴァンスに目を向け始める契機は、あるいは日仏の書物であったり、あるいは自らの生活体験であったりと様々だったが、彼等の研究はやがて相互に関り合い、また本国フランスの動きとも関連を持つようになる。日本の近代プロヴァンス文学研究は、第二次大戦終戦から 1955 年までの 10 年の間に、単なる紹介や他言語を経由した重訳の時代を脱して学術的な研究と直接訳の時代を迎え、やがては世界に向けてその成果を発信しようという段階に達したのである。

本稿では、戦後の近代プロヴァンス文学の研究・紹介に特に大きな功績のあった 3 人の研究者、すなわち仏文学者の村松嘉津、比較文学者の畠中敏郎、そしてプロヴァンス文学研究者の杉冨士雄の、主として戦後 10 年間における業績を紹介しながら、それぞれの研究の特色は何か、また彼等がお互い同士、あるいはフランスを中心とする諸外国の近代プロヴァンス文学研究者達との間で、どのような関係を結びながら、プロヴァンスとその文学に関っていったのかを追ってみたい[6]。

1

第二次大戦終結の翌年、プロヴァンスはまず、文学ではなく料理の紹介を通じて、活字の世界に姿を現した。なにしろ食糧難の時代である。食物が絶対的に不足していれば、せめてその話をしたり聞いたりしたいのが人情の自然であろう。そんなとき、自分がかつて親しんだプロヴァンスの海の幸・山の幸を随筆に描き、その豊かな食卓の幻で人々を魅了したのが、後に『巴里文学散歩』や『ヴェルサイユ春秋』など多くの著作を世に送ることになる仏文学者の村松嘉津（1906-1989）であった。

村松は、フランス人の夫の実家が南仏オーバーニュにあったため、戦前の

[6] なお、本稿は戦後 10 年間の研究・紹介のすべてを網羅しようとするものではない。この時期には、本稿で取り上げる 3 人の書いたもの以外にも、近代プロヴァンス文学を紹介した文章は多く存在する。その中で今回、プロヴァンス文学の専門研究者である杉と並べて、村松・畠中の 2 人を特に対象とする理由は、彼等がフェリブリージュの文学に関する研究・紹介・翻訳などを複数手掛けていること、そしてプロヴァンス語原典からの直接訳を試みていること、以上の 2 点である。また、本稿における事実関係の記述は、基本的に 3 人の残した文献資料に拠った。

一時期をその土地で過ごしていた[7]。1940 年にヨーロッパの戦火を避けて単身帰国し、そのまま日本で終戦を迎えた村松が、戦前の平穏な日々の暮しを振り返って綴り始めたのが、プロヴァンスを題材とする一連の随筆だった。その第一号が 1946 年 6 月に発表された「プロヴンス随筆[8]」で、ここでは南仏の食卓を飾る野趣あふれる料理が、書物から得た知識と個人的な見聞とを織り交ぜながら、生き生きと語られている。特に筆者が「美味の極致」とするニンニク料理「アイオリ[9]」や、逆にとうとう食べる気になれなかったというエスカルゴ料理などは、今でも十分に読む者の食欲と好奇心とを刺激するが、食糧のない時代であればなおさらその刺激は強烈だっただろう。

その後も主に食物関連の文章が書き継がれていくが、時折はフェリブリージュ紹介にかなりの筆を割いた「プロヴンス地方主義(レジオナリスム)[10]」(1946 年 9 月)のような文学談も現れ、1947 年 8 月には『プロヴンス随筆[11]』の総題の下、一連の文章は単行本にまとめられて、「フランスはプロヴンス＋パリである、プロヴンスの自然と生活を知る好著[12]」という謳い文句で世に送り出された。この威勢のよい文句の裏を返せば、それだけ当時プロヴァンスという土地は知られていなかったわけで、著者の村松も「序」において、フランスといえばパリ、フランスの文学といえばフランス語の文学のみが取り上げられる現実に触れ、その上で、南フランスにはパリを中心とする北フランスとはまったく異なる文化が存在するのだと力強く主張している。

> ［…］ひとたびフランスの地を北から縦に南下する時、人はおのづからその空氣や風物や古蹟の中に、北佛と南佛との間に引かれた、明らかな自然の境界線に氣づくであらう。風土、人種、言語、文化、いづれの點からも南佛はむしろ

---

[7] 村松の夫は東洋学者でコレージュ・ド・フランス教授も務めたエミール・ガスパルドヌ Emile Gaspardone（1895-1982）。その実家があったオーバーニュはマルセイユの東郊である。村松の戦前のオーバーニュ滞在がどのくらいの期間だったか、正確には分からないが、おそらく 1937 年から 1940 年までの間、主として夫の休暇をこの地で過ごしたものと考えられる。

[8] 村松嘉津「プロヴンス随筆　一 にんにく　二 野兎　三 つみ草　四 かたつむり エスカルゴーとリマソン」、『藝林閒歩』第 3 号、東京出版、昭和 21 年 6 月。

[9] プロヴァンスの代表的な家庭料理。ミストラルが 1891 年に創刊したプロヴァンス語の旬刊紙のタイトルにもなった。aiòli は直訳すれば「ニンニク油」の意（ai=ail, oli=huile）で、要はニンニク入りマヨネーズのこと。この「ニンニク油」を、ゆでた野菜・白身の魚・卵などにつけて食べる。

[10] 村松嘉津「プロヴンス地方主義」、『藝林閒歩』第 6 号、昭和 21 年 9 月。

[11] 村松嘉津『プロヴンス随筆』、東京出版、1947 年。

[12] 『藝林閒歩』第 16 号、昭和 22 年 8 月、13 頁の新刊広告欄。

イタリヤやイベリヤの南歐に屬し、それらとともに地中海文化圏の一環を成すものである。[…]

地中海に臨む國々とその中に立つ島々は、早くから東西文化の渦巻く交流の波に洗はれて來た。その波はそこ一帯にオリーヴを茂らせ、一様にアマンドを咲かせ、いちぢくを稔らせた。これら植物の分布圖は、おのづからこの大きな共通文化の世界を限るもののやうである。

プロヴンスの地のある土産、ある植物の流轉の歴史や擴散の範圍をたどることは、さながらこの地中海文化圏の性格を明らかにする所以であり、同時に日一日と色うすれ行くプロヴンスの後姿を描き、パリの外なるフランスの一隅を示すよすがにならうかと、ここに筆を執つて見た次第である[13]。

ただし食糧不足のせいでつい食べ物に話が偏りすぎたと村松は反省しているが、食習慣の相違や類似の背景により広い文化の異同を見る村松の姿勢は随所に認められる。例えば「にんにく」の項では、「フランスは元來人種的にも文化的にも劃然と南北に分たれてゐるが、にんにくに就いても、北方で全く之を嗜まないのに反して南方、所謂プロヴンス地方では最も重要な香辛料である[14]」と書く。また「オリーヴ」の項では、「オリーヴ地帯はそのまゝ『地中海文化圏』だ。[…] そこにおける自然と風物には極めて共通のものがあると同時に、人種や國境の差違にも拘らずそれぞれの習俗の中に相互に非常に近いものが見られる[15]」と記す。ニンニクやオリーヴの引く自然の境界線がプロヴァンスを北フランスと隔て、地中海沿岸諸国と結び付けているというのである。

このように村松は、主として食文化を通じて南北フランスの相違と、プロヴァンスの地中海文化圏への帰属を示しているが、その筆はいくつかの項で言語や文学の問題にも及んでいる。特に文学については、「プロヴンス地方主義」「プロヴンス文学と地中海文化」等の項で中心主題として取り上げ、ミストラル作品の引用を多く交えながら、この詩人が率いたプロヴァンス語プロヴァンス文学復興運動・フェリブリージュが、北フランスの文壇よりも隣国スペインやイタリアの文人達との間により強い絆を結んだことを明快に述べている。

村松の解説によれば、ミストラルら 7 人の詩人による文学復興運動として 1854 年に発足したフェリブリージュは、ミストラルの叙事詩『ミレイユ』

---

[13] 村松『プロヴンス随筆』の「序」、2-3 頁。
[14] 村松「にんにく」、『プロヴンス随筆』、5 頁。
[15] 村松「オリーヴ」、『プロヴンス随筆』、164-165 頁。

（1859）の成功以後、瞬く間に勢力を拡大し、プロヴァンスの自治権獲得といった政治目標をも掲げる社会運動にまで発展した。その結果、国家を分裂させる分離主義として危険視されるようになり、ミストラルが 1866 年に発表した第二の叙事詩『カランダル』や諷刺詩「伯爵夫人[16]」は、文学的評価を受ける以前に、まずその政治性を強く非難された。『カランダル』においては、盗賊から逃れるため城を捨てた貴族の姫が、「伯爵夫人」においては、腹違いの姉に迫害される伯爵夫人が、フランスに併合されて没落したプロヴァンスの象徴と読まれるためであった。

パリでは疎まれたフェリブリージュの思想は、しかし周辺諸国に賛同者を見出していた。1860 年代にはやはり民族復興運動を進めていたカタロニア、1870 年代には本土統一したイタリアとの交流が活発化し、ここに至ってミストラルは政治的国境を越えたラテン文化連邦という夢を抱くようになる。1878 年にミストラルが作った「ラテン民族の歌」には、その理想が高らかに謳われている。このように述べて、村松は「ラテン民族の歌」の抄訳を掲げている。その一節を引こう。

> 「起きよラテンの民族……
> 「汝の母なる言葉、この大いなる河は七つの枝に擴ごりて、天國の反響の如く、戀と光を流し行く、汝の黄金の言葉、（王たる民族のロマンの娘）は歌となりて、言葉に理ある限り人の唇に歌はれん。
> 「起きよラテンの民族…… […]
> 「陽に照れる汝の丘には、平和の木なるオリーヴ茂り、汝の土地は豐かなる葡萄畑を誇るなり。ラテンの民族よ、常に燦かしき汝の運命を忘るなく、希望に向ひて立上り、十字架の下に手を組めよ。
> 「起てよラテンの民族[17]……

---

[16] 「伯爵夫人 La Coumtesso」は抒情詩集『黄金の島々 *Lis Isclo d'or*』所収の諷刺詩。村松『プロヴァンス随筆』、194 頁に抄訳がある。

[17] 村松「プロヴァンス文學と地中海文化」、『プロヴァンス随筆』、200 頁。「ラテン民族の歌 A la Raço latino」は『黄金の島々』第 2 版以降収録の諷刺詩。引用部の原文は以下の通り。« Aubouro-te, raço latino,… // Ta lengo maire, aquéu grand flume / Que pèr sèt branco s'espandis, / Largant l'amour, largant lou lume, / Coume un resson de Paradis, / Ta lengo d'or, fiho roumano / Dóu Pople-Rèi, es la cansoun / Que rediran li bouco umano, / Tant que lou Verbe aura resoun. // Aubouro-te, raço latino,… // Sus ti coustiero souleiouso / Crèis l'óulivié, l'aubre de pas, / E de la vigno vertuiouso / S'enourgulisson ti campas : / Raço latino, en remembrançe, / De toun destin sèmpre courous, / Aubouro-te vers l'esperançe, /Afrairo-te souto la Crous ! // Aubouro-te, raço latino,… » Frédéric Mistral, *Lis Isclo d'or*, Edition critique établie par Jean Boutière, Didier, 1970, p. 398 et 402.

南フランスと周辺諸国の連帯を力強く謳う「ラテン民族の歌」は、この村松訳が本邦初訳である。翻訳の底本は明記されていないが、「プロヴァンス地方主義」の項で題名が挙げられている『プロヴァンスの歌人』という詩集である可能性が高い。この『プロヴァンスの歌人』とは、おそらく 1906 年にアヴィニョンで出版された全編プロヴァンス語（対訳なし）の詩歌集 *Lou Cansounié de la Prouvenço*[18]のことと考えられる。この推測が正しければ、村松の翻訳はプロヴァンス語原典からの直接訳ということになるが、ときに時制や行の順序を変えているほかは忠実な訳文であり、原詩の持つ昂揚感をも伝えている点で優れた翻訳といえる。

さて、『プロヴァンス随筆』の序文で語られていた「オリーヴの茂る地中海文化圏」のイメージはプロヴァンス文学の造詣にも支えられていたことがこうした条から見て取れるわけだが、ラテン民族をひとつに結び合わせ、過去の栄光を取り戻させようというミストラルの理想に理解を示しながらも、村松はそれを自然の趨勢に背いた観念的な夢、と断ずる。ラテン文化連邦の実現はおろか、フランス国内でのプロヴァンス語の復権さえ十分には達成されず、ミストラルの没後フェリブリージュは勢いを失い、プロヴァンス語はまた一方言に逆戻りしたではないか、と。

村松がこう言い切る根拠は、彼女自身のプロヴァンス語との接触体験にあった。1948 年に発表された「プロヴァンス文學とプロヴァンス語のゆくへ[19]」という文章によれば、戦前、村松の夫の実家周辺にはまだプロヴァンス語の使い手が存在していたが、それは基本的に中高年層であり、若い世代はほとんどがフランス語を使っていた。近所の奥さんの噂をして、若いのに珍しく達者にプロヴァンス語を使うと感心したときには、それは当り前だ、彼女はもと女中だったのだから、という答が返ってきたという。「この方言（ペイア）を使ふといふことは、その人が無教育な下層民だといふことに他ならない[20]」（少なくとも周囲からはそう見なされる）という現実を村松は目の当りにしたのである[21]。

---

[18] *Lou Cansounié de la Prouvenço*, Avignon, Albert Pinguet, 1906 (réimpression, Nice, Serre, 2001). ミストラルの詩 11 編、オーバネルの詩 6 編、その他 15 編の詩を、冒頭の 1 編を除き、すべて楽譜付で収めた詩歌集。今回は 2001 年の版を参照した。「ラテン民族の歌」は p.41-43 に収録されている。（題は La Raço Latino となっている。）

[19] 村松嘉津「プロヴンス文學とプロヴンス語のゆくへ」、『世界文學』第 19 号、世界文學社、昭和 23 年 3 月。

[20] 同上、36 頁。

[21] 村松はまた、フェリブリージュについても、その運動が存続しているのかどうか、少なくとも自分の注意を引くような目立った活動はなかったと記している。「プロヴ

こうした自分自身の体験と実感に基づいてプロヴァンスの言語と文学について語るのは現地で暮した者の特権であるが、むしろ重要なのは、村松が彼女以前の紹介者達 —— 例えば「農民詩人」としてのミストラルに焦点をあてた大正期の農民文学者達など —— にはなかったフェリブリージュと国外のつながりという視点を導入したことである。地中海文化圏という広がりを提示することで、プロヴァンス文化が一国内の地方文化という閉ざされたイメージから脱却することを可能にしたのは村松の功績と言ってよいのではないか。

もう一つ興味深いのは、村松がプロヴァンス語という言語の問題を、やや意味合いは異なるものの、戦後日本の状況に引きつけて自分の問題として考えていたことである。村松が随筆の連載を始めたのは 1946 年 6 月だったが、この年 11 月に政府は「現代かなづかい」と「当用漢字表」とを告示し、国語・国字の簡易化を図った。この改革は、単なる用字上の問題にとどまらず、日本語の文章表現そのものの平易化を進めたとされ、当時から多くの批判を受けた。村松も反対派の一人であり、言語の背負う歴史を軽んじ、ただ効率を追求するようなやり方は認めがたいと、後々まで歴史的仮名遣いと旧漢字を固守したが、彼女から見ると、蔑まれ見捨てられゆくプロヴァンス語も、漢字を制限され表現力を失いゆく日本語も、等しく時代に敗れた言語なのであった。ミストラル没後のフェリブリージュの衰退を語った後で、村松は次のように書いている。

> 歴史の大きな流れはフランスだけでなく、全地球面の單一化、平均化、凡俗化、低劣化といふ方向に動いてゐるやうだ。既に已に、ラテン文化、ゲルマン文化、スラヴ文化乃至漢文化といふやうな各文化圏の周線さへ、日一日とうすれて、やがては消えて行くかに思はれる。たとへばわが漢文化圏において、安南では夙に漢字が廢されてローマ字が國字となつて居り、日本では漢字が制限され、やがてはローマ字の國字化も實現しようとしてゐる。日本と中國と安南と朝鮮とをつなぐ漢文化聯盟などを夢みるには、世は既に餘りに水平化してしまつてゐる[22]。

世界の水平化を歎きながら、村松はそれをある程度まで不可避の歴史の流れと考えてもいる。ただ、心情的には彼女は常に歴史ある古いものの側に立っている。ミストラルの率いたフェリブリージュが、国内ではフランス語の圧

ンス地方主義」、『プロヴンス随筆』、217 頁。

[22] 村松「プロヴンス文學と地中海文化」、『プロヴンス随筆』、203 頁。

力に抗しきれず、国外ではラテン連邦の夢を実現できずとも、「ミストラルの夢は夢として、永遠に消えないであらう[23]」と村松は書く。プロヴァンスにとってのラテン連邦が夢だったように、日本を含めた漢文化圏がその共通の文化によって結ばれることもまた夢である。それでも頑に古い日本語を守って文章を書き続けた村松は、自分もまた信念を抱いて夢を追う人として、プロヴァンスの詩人のよき理解者だったのである。

もっとも、後になって南仏語の綴り字問題についてより詳しい知識を得たとき、村松はある矛盾に突き当る。それは、フェリブリージュの表記法が、語源を明らかにすることよりも音声との一致を優先した表音式表記だったことである[24]。旧漢字・旧仮名遣いを守る村松の立場からすれば、語源を明らかにしないフェリブリージュ式の綴り字は賛同しかねるものであったはずだが、村松はそれを「既に消え去らうとするプロヴァンス語を、この容易簡便な綴字法を以て一般に周知させ、早い復興を實現しようといふ非常な焦躁感から發したもの[25]」として擁護している。村松は単なる「主義」の信奉者である以上に、自分の親しんだ文化・伝統への同情者なのである。

村松の『プロヴンス随筆』は、表題からも分かる通り、学術的な性質の文章ではないが、食物という親しみやすい話題を多く取り上げることでプロヴァンスという土地への関心を高め、また「地中海文化圏」という視点を提示することで、フランスの一地方文化という以上の豊かな広がりをプロヴァンス文学に与えた点は高く評価すべきであろう。さらに、抄訳ではあるが、かつて日本語にうつされたことのなかったミストラル作品を複数、それもおそらくは原詩から直接訳したことも特筆すべき業績である。自分の生活体験と心情的共感に基づいてプロヴァンスとプロヴァンス文学を語った村松の著作が、この分野での戦後最初の成果であった。

2

1947 年に『プロヴンス随筆』を出版した村松嘉津は、翌 1948 年 3 月にも「プロヴンス文學とプロヴンス語のゆくへ」と題する言語・文学論を発表す

---

[23] 同上、204 頁。
[24] この綴り字問題については、後述する。
[25] 村松嘉津『新版 プロヴァンス随筆』、大東出版社、1970 年、195 頁。村松はこの引用部に続けて「その點、日本の新國字制度の成立とは方向が正反對であり、同日の談でないこと、一考の要も無いであらう」と書いている。

る。同じ頃 8 年ぶりに渡仏、その後も活発な執筆活動を続けるが、プロヴァンス関連の文章はあまり見られなくなる[26]。しかし、村松がプロヴァンスから遠ざかり始めたこの時期に、近代プロヴァンス文学は徐々にアカデミックな場に進出し始めるのである。

フランスで、地方語の教育を認めるデクソンヌ法が可決された 1951 年、フランス語学会編の『フランス語研究』誌に中原俊夫の「Félibrige 概觀[27]」という論文が載った。これはもともと学会誌用に書いたものではなく、より「低い層をめざしたもの」であった旨の注がついているが、それでも単なる文学史的記述には終らず、フェリブリージュにとって非常に重要であった表記法の決定などの語学的な問題について、具体例を挙げながら手際よくまとめてある。1854 年、7 人の詩人がフェリブリージュを結成し、機関誌の発行を決めたことを記した後、中原はすぐに綴り字の問題を取り上げる。

> かくて Félibrige は發足したが、彼等のまずしなければならないことはやはり正字法の制定であつた。各語をその由來するラテン語に近い形で表す方式を奉じる人々に對し、Roumanille は飽くまでも音標的表記法を重んじ、能う限り現代の發音そのまゝを文字にしようと主張してやまなかつた。Félibres はこれに從つたが、さればといつて、全く語原を無視すれば、南佛語を混亂に導くばかりか、輝かしい古代南佛語との脈絡を絶つことになる。音韻重視と歴史尊重、この相反する正字法上の原則を如何に融和させるかに種々苦心を拂わねばならなかつた。
>
> 例えば —— u の字はフランス語と同じ [y] の音のほか、二重母音の時はラテン語式に [u] の音を持つものとした。-a の女性語尾を發音の實際に則し -o とした[28]。

中原はさらに、名詞の前に置かれた形容詞の複数語尾 -s は、名詞が母音で始まるときだけリエゾンのために残す、といった複数の規則も挙げている

---

[26] 村松が 1950 年代に書いた南仏関連の文章には、「ドーデーの風車小屋」「ヴォークリューズの谷間」などがある。いずれも 1961 年、『フランスに生きる』（白水社）収録後、『新版 プロヴァンス随筆』（大東出版社、1970 年）に再録されている。

[27] 中原俊夫「Félibrige 概觀」、『フランス語研究』第 3 号、フランス語学会編、1951 年 11 月。なお、この稿の末尾には、オーバネルの詩集『笑み割るる柘榴』のエピグラフ（ミストラルの詩 À Lamartine の一部）の原文と翻訳とが添えられている。

[28] 同上、25 頁。上に村松訳を引いた「ラテン民族の歌」のリフレイン、「起きよラテンの族 aubouro-te, raço latino」を例にとれば、au の中の u は [u] と発音され、a とともに二重母音 [au] を形成する。ただし ou においては、フランス語と同様に o とともに複母音として [u] を作る。また、民族 raço は語源式では raça と表記されるが、表音式では実際に即して -o と綴られる。形容詞 latino についても同様。

が、大変な苦労の末に決定されたその正字法は、発音の異なる地域では応用が難しいことなどから結局全南仏語の共通基準となるには至らず、それがフェリブリージュの作品の普及を妨げたと述べている。この年にフランスで地方語教育が認められたという動きを知ってか知らずか、いずれにせよ近代プロヴァンスの文学復興運動とは無関係だと思ったものか、中原はフェリブリージュを「例えば華麗な一年草の花に似て」、後継者のない過去の運動だとしている。これは村松が『プロヴンス随筆』で示したのと同様の見解である。

この中原論文が発表された翌年の 1952 年、今度は「ミストラルとプロヴァンス語[29]」という論文が『大阪外國語大學學報』に載った。この論文において、フェリブリージュという団体の現在はどうあれ、戦後にまで続くフランス国内での地方主義運動にミストラルらプロヴァンスの詩人達が与えた影響力は評価すべきではないかという問いを投げかけたのは、比較文学者の畠中敏郎（1907-1998）であった[30]。

畠中は戦前からアルフォンス・ドーデなど南仏出身作家の作品を通じてプロヴァンス語に関心を持っており、その関係でミストラルの自伝『私の生立ち。思い出と物語』にも目を通していたことが、1939 年に翻訳したドーデの『アルプスのタルタラン』に添えた序文に記されている[31]。正確な時期は不明だが、畠中は中原からプロヴァンス語のてほどきを受けたといい、また村松の『プロヴンス随筆』を早々に入手して読んだとも述べている[32]。

「ミストラルとプロヴァンス語」において、畠中は村松嘉津の名を引き、実際にプロヴァンスで暮し、プロヴァンス文学の素養もあるこの先達に敬意を表しながらも、プロヴァンス語を時代に取り残されて消え行く言葉、フェリブリージュを「消える前のランプの強い燃え上り[33]」と評していることに疑問を呈している。滞仏経験のある村松と違って、畠中のプロヴァンスに関する情報源はもっぱら書物であったが、フェリブリージュは時代に逆らう無謀な試みであり、プロヴァンス語は遠からず滅びる言葉だという見方が 19

---

[29] 畠中敏郎「ミストラルとプロヴァンス語」、『大阪外國語大學學報』第 1 号、昭和 27 年 5 月。

[30] 畠中敏郎の業績（1972 年以前）は、畠中自身によってまとめられている。「畠中敏郎経歴」、*Etudes françaises* 第 10 号、大阪外国語大学フランス語学科研究室（代表 中原俊夫）、1972 年 3 月、147-152 頁。

[31] ドーデ作、畠中敏郎訳『アルプスのタルタラン』、白水社、1939 年、12 頁。

[32] シャルル・モラース著、畠中敏郎訳『ミストラルの智慧』の「あとがき」、青山社、1987 年、120 頁；畠中「賀須玻嘉津刀白のこと」、『流域』第 27 号、1989 年 11 月、6 頁。

[33] 村松「プロヴンス地方主義」、『プロヴンス随筆』、218 頁。

世紀当時から、当のプロヴァンスをも含めて、フランス国内で一般的だったことは十分に認識していた。それは例えばアルフォンス・ドーデの息子レオンが伝えるミストラルと同年のプロヴァンス人の言葉、「わしの年配の人間はもうプロヴァンス語を正しくは話さないし、Mirèio や Calendau を理解することもむづかしい[34]」などを引用してあることからも明らかである。

こうした事情を承知の上で、畠中が村松とは違う評価をフェリブリージュの活動に与えるのは、フランスという国家の枠内で見ればこそプロヴァンス語は国語フランス語と対立する地方語であるが、一度その枠を取り払ってしまえば一つの独立した文学言語だ、という考えを強く持っているためである。北フランスが分離主義として排斥したフェリブリージュは、むしろフランス語文学と異なる文学を生み出すことでこの国に豊かな多様性を与えたと考えるべきであり、そのようなプロヴァンスの文学運動の価値を正しく評価したのは、むしろ周辺諸国を中心とする諸外国であったと畠中は言う。

> 「フランスのやうな國は二つの文學を持つてよい。」この今一つのフランス文學、すなはちプロヴァンス文學は、北フランスにおいてこそ前述の理由［＝分離主義の疑いなど］で十分に受けいれられなかつたが、他の外國においては事情が異つた。語系を一にし、從つて最も理解せられやすい南歐諸國においてはもとより、その他の國においても、結局フランス語もプロヴァンス語もひとしく外國語であつてみれば、どちらの作品を讀まうと大した差にはならない。この故にプロヴァンス語文學は、却つて諸外國に廣く傳へられ、フランス語文學に對する關心の何分の一かには過ぎないとしても、各國にそれぞれの讀者、愛好者を持つたし、今後も持ちうるであらう。ノーベル文學賞を受けたことがその作品の價値を増すことにはよしならなくとも、ノーベルの國にまで認められたことは、ミストラルの、從つて Felibrige の外國における評價の程度を見るに十分である[35]。

この「（外国においては）フランス語もプロヴァンス語もひとしく外国語」という見方は、村松がオーバーニュでの見聞として書き留めた「プロヴァンス語は無教育な下層民の言葉」というフランス国内の見方に鋭く対立している。畠中はまた、フェリブリージュを消える前のランプにたとえた村松の言葉に対して、螢光燈の時代になってもランプにはランプの存在理由がある、フェリブリージュが完全に過去のものになったとしてもその残した業績には

---

[34] 畠中「ミストラルとプロヴァンス語」、78 頁（出典は *Fantômes et vivants*）。
[35] 同上、81 頁。引用冒頭の「フランスのやうな國は二つの文學を持つてよい」は、批評家ヴィルマン Abel Villemain（1790-1870）の言葉。

価値があるはずだ、と述べている。そして、1947 年の雑誌 *Books abroad* によれば、戦中戦後のフランスでは地方主義が盛んになり、1945 年には複数の学位論文がプロヴァンス語について書かれたそうだと報告し、こうした近年の傾向にもフェリブリージュの影響が認められはしないだろうか、と問いかける形で文章を結んでいる。フェリブリージュの創作活動自体は停滞したとしても、その精神は脈々と生きているというのである。

この 1952 年の時点ではフェリブリージュを含めた戦後の南仏文学の動向が日本には十分伝わっておらず、こうした曖昧な書き方をせざるをえなかったようだが、ともあれ畠中はミストラルとフェリブリージュへの関心を持ち続けた。1954 年には、以前から手掛けていたドーデのタルタラン 3 部作の最終巻『タラスコンみなと』(1890) の翻訳を再開、1955 年に完成させて世に送っているが、この作品は冒頭からミストラル本人がドーデとともに登場して物語の舞台タラスコンまで馬車で同道し、また作中数箇所でその作品が引用されるなど、明らかにミストラルとの関りが深い。これらはまだ表面的な関りにすぎないが、実のところ作者ドーデはこの作品において、詐欺師にだまされて植民地建設という危い事業に乗り出す主人公タルタランを、地方の復権という見果てぬ夢を追う詩人と重ね合わせて描いているのではないか、「好意と、よい意味の茶気や冗談」をもってミストラルとフェリブリージュを戯画化したのではないか。畠中は「解題」でこう示唆している[36]。

陽気なほらふきの代名詞にもなっているタルタランに、フェリブリージュの指導者ミストラルの姿を見るのは奇妙なようだが、少なくとも『タラスコンみなと』に関しては、批評家のティボーデらフランスの研究者の間でも両者の類似が指摘されてきており、そこに作者の親しみをこめたパロディを見るのが現在ではほぼ定説となっている[37]。とすると、最も皮肉な描写は、植民地にするはずの島が実際は英国領であったためにイギリス人の捕虜とされ

---

[36] ドーデー作、畠中敏郎訳『タラスコンみなと』、岩波文庫、1955 年 (1957 年再版発行)、237 頁。このミストラルとフェリブリージュの戯画化という問題は、最終的に次の文章にまとめられている。畠中「ドデーから見たミストラル」、『比較文学の小道』、大阪外国語大学フランス会内畠中敏郎先生論集刊行会、1973 年。
なお、この論文はもともと 1967 年に国際学会で発表されたもので、仏語版の « Frédéric Mistral vu par Alphonse Daudet » (*Mélanges de philologie romane dédiés à la mémoire de Jean Boutière*, Liège, Solédi, 1971, t. II, p. 773-782) はプレイヤード版ドーデ集第 3 巻に参考文献として挙げられている。Alphonse Daudet, *Œuvres*, t. III, texte établi, présenté et annoté par Roger Ripoll, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1994, p. 1339.

[37] Daudet, *Œuvres*, t. III, p. 1334. ここには、ティボーデ Albert Thibaudet (1874-1936) らの説と並んで、畠中の説も紹介されている。

たタルタランが、熱く故郷を語り、ミストラルの詩を朗々と誦する場面ということになろうか。畠中訳から引用しよう。

> タルタランは有翼虎龍（タラスク）の縁起を、聖女マルタやその青いリボンのことをものがたる。自分の国びとの話をし、タラスコン族や、そのしきたりや、その移住を語る。それから自分の政府や、計画、改革のかずかず、準備していた新法典のことをあきらかにする。法典とは、なんとまた、そんなことを口にし出したのは、パスカロンにとってさえ、それが皮切りだ。しかし国民の指導者たちの広大な脳味噌でこねまわしていることの全部が、われわれに解ってたまるものか。
> 　思いは深く、気は浮いて、彼は国の歌のかずかずを、海賊に捕えられたジャン・ド・タラスコンや、そのスルタンの娘との恋のいきさつなどを歌った。
> ［…］
> 　身は大将の位にて —— 月の桂を —— いただけり —— みめうるわしき姫君の —— 熱き思いを寄せけるが —— あるとき彼にいいしとか[38]……

歌い終えたタルタランは、続けてファランドールと呼ばれるプロヴァンスの民族舞踊を披露に及ぶが、ミストラルにもこうしたにぎやかな、いささか騒々しい一面があり、パリでの社交の折など同席者に眉をひそめられることもあったのは事実らしい[39]。また、自分の政府や改革、法典を語るという記述も、プロヴァンスの連邦化を目指すなど、一時期政治に関心を抱いたミストラルの姿に合致する。このように、上の引用部のみからでも、畠中が「解題」で行った指摘の正しさをある程度まで窺うことができるのである。

なお、引用末尾のミストラルの詩は、「背教者[40]」という題の作品で、海賊にさらわれてトルコに連れて行かれたプロヴァンス人ジャン・ド・ゴンファロンが、出世して皇帝の娘に愛されるまでになりながら、偶然故郷の歌を耳にして強い望郷の念に駆られ、すべてを捨てて帰郷するという内容のものである。引用中の部分訳はドーデの仏訳からの重訳だが、ドーデ訳は原作者ミストラルの仏訳よりも原詩に近い逐語訳であり、結果として畠中訳もほぼ原詩通りのものとなっている。

さて、上で見てきた畠中の「（タラスコンみなと）解題」は 1955 年の春に

---

[38] 『タラスコンみなと』、168 頁。

[39] 例えばエドモン・ド・ゴンクール（1822-1896）もこうした騒々しさを嫌った一人である。Goncourt, *Journal*, t. XIII, Fasquelle & Flammarion, 1956, p. 115.

[40] 「背教者 Lou renegat」は抒情詩集『黄金の島々』所収。この詩も曲が付けられて広く親しまれた。レオン・ドーデ（1867-1942）は、子供の頃よくこの歌を歌ったと回想している。Léon Daudet, *Fantômes et Vivants*, in *Souvenirs et Polémiques*, Robert Laffont, « Bouquins », 1992, p. 35.

執筆されているが、ちょうど同じ頃、フランスでは第一回南仏語南仏文学国際学会[41]の準備が始められていた。この会が前年のフェリブリージュ結成百周年に際して企画されたことにはすでに触れたが、プロヴァンスのみならず南仏全域を対象とする学会を開催するにあたっては実に様々な問題があった。一例を挙げれば、アヴィニョンを中心とするフェリブリージュ派と西のトゥールーズを中心とする地域の地方主義者との間には、以前から表記法の問題をめぐる対立が続いており、表音式を採る前者と語源を重視する後者とは、いまだ妥協点を見出せずにいた[42]。そして最終的には、近代南仏語の表記法や教育はこの会義では討議の対象としないという取決めをして、ようやく学会開催は実現に向かったのである。

1955年9月初旬にアヴィニョンで開催と決まったこの学会の最初の案内は同年1月末に出され、発表希望者は3月下旬までに題目を提出すること、という連絡がなされたが、この通知が畠中の手に入ったのは3月であった。期限にも間に合わず、そもそも参加できるかどうかも分からなかったため、発表の申し込みはできなかったが[43]、最終的には文部省在外研究員としての渡仏が決まり、畠中は記念すべき第一回南仏語南仏文学国際学会への出席がかなうことになる。さらに、当時パリ留学中であった大橋保夫が畠中に同行することも決まり、ここに日本の研究者がフランスの近代南仏文学研究界に公式に参入したのである。

このアヴィニョン国際学会には22カ国から180人の研究者が参加、約3分の1の66人は地元フランスからだったが、他にもイギリス23人、ドイツ18人など、ヨーロッパの大部分の国から研究者が集まった。その一方で、アフリカは参加国がなく、アジアからは日本が唯一の参加国であったので、畠中と大橋の存在は非常に珍しがられ、かつ喜ばれたらしい。当時のアヴィニョン市長でこの会議の委員長を務めていた元首相ダラディエが握手を求めてきたり、南仏の新聞に2人の写真が載ったりもしたという[44]。また、フランス

---

41 Ier Congrès International de Langue et Littérature du Midi de la France.

42 「表音派」・「語源派」にはそれぞれ「フェリブリージュ派、プロヴァンス派、アヴィニョン派」・「オクシタン派、ラングドック派、トゥールーズ派」など多様な呼称があるが、多田和子によれば、-o と発音される女性語尾の綴りを音に則して -o と書くか、語源に則して -a と書くかの違いから、「O 主義者」・「A 主義者」とも呼ぶという。多田「オック語の書字法について」、『現代オック語文法』、大学書林、1988年参照。

43 この学会の詳細に関しては、主として次の文章に拠る。畠中「『Avignon 國際學會』報告」、『大阪外國語大學學報』第5号、昭和32年4月。

44 畠中「『Avignon 國際學會』報告」、27頁。ダラディエ Edouard Daladier（1884-1970）は南仏出身の政治家で、第二次大戦以前から南仏語の復権に賛同する姿勢を見せてい

の代表的な研究者達[45]を直に知る機会を得たことも、後々のために貴重なことであった。

時代は中世から現代まで、言語学も文学も可という守備範囲の広い学会ではあるが、他の学会の枠には納まり切らない「南仏」ならではの研究ということで、ミストラルらフェリブリージュ関係のそれが大きな位置を占めていた。畠中が注目した発表に、作家論、辞書の編纂過程の調査、作品中の語彙に関するものと切り口は様々ながらミストラルを対象としたものが多かったのは、畠中自身のこの詩人への関心も手伝っていようが、やはりこの分野に見るべきものが多かったのであろう[46]。そうした発表を聞くにつけても、畠中は自分が発表者となれなかったことを残念に思い、いつかは発言の機会を得たいという思いを強くしたようである[47]。

畠中はこの会議の詳細を翌年報告書にまとめているが、興味深いのはそこに記されているこの会議への現地の反応である。南仏語南仏文学をテーマとする初めての国際学会とあって、南フランス各地の新聞は連日かなりの紙面をこの学会の報道にあてていたが、世界各国から研究者が集まってきたことに一般の人々は驚き、今更ながら自分たちの言語・文学の価値を再認識したようだ、と畠中は伝えているのである。

> 實は，地元の南 France の一般の人たちは，France 各地からはもとより，世界各國から多くの研究者の集まつたのに，多分の誇りと同時に相當な驚きを感じたらしい．Carmen や Colomba の作者である Prosper Mérimée がはじめて Rhône 河を下つて來たときには，イスパニアへでも着いたかと思つたといふ（Mérimée : Notes d'un voyage dans le Midi de la France）Avignon も，百二十年後の今日では，もちろん Paris を中心とする France 語，France 文藝の土地であるが，その土地の人は，自分たちの祖先傳來の言語とその所産とがこれだけの研究價値をもつものであることを，いま悟らせてもらつたわけである．將來における Provence 語，

たと言われる。畠中らの写真が載ったという新聞は未見。今後の調査で確認したい。

[45] 例えば、当時のプロヴァンス研究所所長でこの第一回国際学会の主催者の一人であったジャン・ブティエール Jean Boutière（1898-1967）や、後のソルボンヌ教授で、会議の翌年（1956 年）から 7 年間フェリブリージュ理事長を務めることになるシャルル・ロスタン Charles Rostaing（1904-1999）など。

[46] 畠中「『Avignon 國際學會』報告」、31-34 頁。

[47] 畠中が最初の発表を行うのは 6 年後の 1961 年、第 3 回国際学会においてである。題目は « Mistral au Japon il y a 50 ans »、内容はミストラル作、森鷗外訳の短編「蛙」をめぐる考察であった。この後、1967 年の第 5 回大会には « Mistral vu par Alphonse Daudet »、さらに 1976 年の第 7 回大会には « Difficultés et facilités de traduire les œuvres mistraliennes en japonais » と題した発表をそれぞれ行っている。

文藝運動の發展と，それに對する民衆一般の理解とに，これが大いに貢獻するところはないであらうか[48].

1952 年の論文「ミストラルとプロヴァンス語」において、外国人にとってはフランス語もプロヴァンス語も同じ外国語だ、と書いていたことからも分かるように、畠中は言語や文化に優劣をつけることを肯んじない。比較文学者としては当然の態度ではあろうが、一国内の地方文化、中央のそれと比べて弱い立場に置かれた文化を研究する場合には、特にこうした姿勢が必要となろう。ちなみに畠中は、フランス関連の研究以外にも、例えば沖縄の古典芸能を研究対象とした「組踊と大和藝能」と題する論考なども残しており、それに関連して「フランス文藝対プロヴァンス文藝が日本文藝対琉球文藝の関係に似ている[49]」と述べているが、こんなところにも比較文学者としての畠中の一貫した姿勢を認めることができよう。

なお、このときの在外研究は翌 1956 年 4 月まで続いたが、帰国前に畠中はパリで『プロヴァンス随筆』の著者・村松との対面を果たしている。1948 年にフランスに戻っていた村松も、ソルボンヌ大学内のプロヴァンス研究所の創立や南仏語南仏文学国際学会の開催といった一連の動きを知っていたはずで、それがプロヴァンス語とその文学の未来に関する彼女の意見を変えていた可能性もあるが、2 人はどのような話をしたことだろう。ともかく、日本国内でプロヴァンスという土地の魅力を伝えた村松に対して、畠中は早い段階から国外に向かって働きかけ、南仏語南仏文学国際学会では 1958 年の第 2 回大会から名誉委員となり、1961 年には念願の研究発表も行って、フランスの近代南仏文学研究界に日本の存在をアピールしていくことになるのである。

3

1947 年に村松嘉津の随筆が出版された後、近代プロヴァンス文学関連の論文が活字になり始めた例として、前節では 1950 年代初頭の畠中敏郎らの論文を見てきた。しかし、紀要や学会誌に掲載された論文以外にも対象を広げれば、もっと早い時期からこの文学を扱った論文は現れていた。1948 年 3 月に東京大学に提出された卒業論文「詩人テオドール・オーバネル、人と作品」

[48] 畠中「『Avignon 國際學會』報告」、35-36 頁。
[49] 畠中『比較文学の小道』、318 頁。

がそれで、執筆者はやがて日本における近代南仏文学研究の第一人者として知られることになる杉冨士雄（1921-1991）であった。

杉自身が後に卒業論文執筆の時期を振り返って、「当時、大学の図書館にはオーバネルの詩集は一冊もなかった[50]」と記しているように、肝腎のテキストすら存在しない中で始められた困難な研究だったが、いったい何が杉をこの分野へと向かわせたのだろうか。杉が文章に残した説明によれば、近代プロヴァンス文学に興味を持ったのは「上田敏訳の「故国」（『海潮音』所収）に魅せられて[51]」のことだという。「小鳥でさへも巣は戀し / まして青空、わが國よ、/ うまれの里の波羅韋增雲。」という見事な七五調でまとめられた訳詩「故國」が、1905 年の発表以来、多くの人に愛誦されてきたのは事実で、この詩と他の 2 編「白楊」「海のあなたの」の原作者としての「オオバネル」の名は日本では早くから知られていた。訳詩に興味を持てばその原作を読みたいと思うのは自然な反応であり、そう考えればむしろ杉以前に研究者が現れなかったことのほうが不思議だともいえる。

正確にいえば、専門の研究者がいなかっただけで、1935 年には比較文学者の島田謹二が、上田敏の訳詩研究の一環としてこれら 3 編の訳詩の原典を明らかにし、原文（および上田敏の参照した英訳）との比較研究も行っている[52]。ただ、雑誌掲載のこの論文が単行本に収められたのは 1951 年のことであり、1940 年代以前には普通には目に触れにくかったと考えられるので、杉がこれを読んでいた可能性はそう高くはない。そうとすると、やはり杉の研究は『海潮音』の訳詩に直接由来するものだったのだろうか。

人が何かに興味を抱くに至る経過や理由は、必ずしも明確に特定されるものではなく、ときには当人にさえ意識されないこともある。それは承知した上で、他でもない 1940 年代半ばという時期に杉の専攻決定になんらかの影響を与える外的要因はなかったか、とあえて当時の状況を眺め渡してみると、少なくとも 2 つの可能性が認められるように思われる。

一つは、上で紹介した村松嘉津の随筆である。杉がオーバネル研究を思い立ったのは 1946 年の終り頃だったというが[53]、村松の雑誌連載が始まったのはこの年の 6 月で、9 月にはフェリブリージュの盛衰を取り上げた「プロヴ

---

[50] 杉冨士雄『南仏抒情詩人テオドール・オーバネル』、大修館、1960 年、359 頁。
[51] 杉冨士雄『ミストラル「青春の思い出」とその研究』、福武書店、1984 年、805 頁。
[52] 島田謹二「『小鳥でさへも巣は戀し』」、『文化』第 2 巻第 6 号（東北帝国大学）、岩波書店、昭和 10 年 6 月。
[53] 杉『南仏抒情詩人テオドール・オーバネル』、359 頁。

ンス地方主義」が『藝林閒歩』誌に掲載されている。この雑誌は東京大学総合図書館にも所蔵されているので、個人で購入していなくとも閲覧は可能だったはずだ。もっとも、「プロヴァンス地方主義」にはオーバネルの名は見られないが[54]、近代プロヴァンス文学全般に興味を抱かせるには十分な内容が含まれている。

もう一つは、専門のマラルメ研究を通じてフェリブリージュに関心を寄せた鈴木信太郎（1895-1970）が杉の師だったことである。1860 年代、南仏トゥルノンに暮していたマラルメはフェリブリージュの詩人達、特にオーバネルと親しくなり、しばしば手紙を書き送っては自分の生活や作品について語った。鈴木はこれを重視して近代プロヴァンス文学関連の文献を収集し、東大仏文科の講義でマラルメを論ずる際、オーバネルやミストラルにも言及することがあった。そして 1943 年の学徒出陣にあたっても、鈴木は嚮としてマラルメの講義を行っているが[55]、杉も 1943 年の学徒出陣組であり、こうした講義でオーバネルの名を耳にした可能性も考えられる。

以上の 2 つの事実を日本で最初のオーバネル研究が現れた契機と見ることは無論推測の域を出ないが、もしこうした周囲の状況が関与したとすれば、杉の研究はまさにこの時期に出るべくして出たものと言うことができるだろう。たとえ一つ一つはささやかであっても、書かれたもの、語られたものが積み重なれば、やがては大きな発展に結びつくのである。

もっとも、いくら研究を志してもテキストがなければ文学研究は始まらないが、これは師である鈴木信太郎の蔵書[56]を借り受けることで一応解決がついた。またプロヴァンス語も、半年という短い期間ながら南仏出身の先生に教えを受けることができた。こうして 1948 年、杉は日本初のテオドール・オーバネルを主題とする卒業論文[57]を完成させる。村松嘉津が『世界文學』誌に「プロヴァンス文學とプロヴァンス語のゆくへ」を発表して、渡仏したのとほぼ

---

[54] 「プロヴァンス地方主義」には、ミストラル以外のフェリブリージュ会員として、シャルル・モーラスやポール・アレーヌの名が挙げられているが、なぜかオーバネルの名は見られない。「プロヴァンス文學と地中海文化」の項でも、ミストラルとルマニーユを取り上げながらオーバネルを省いているのは不思議である。

[55] 鈴木信太郎「『半獣神の午後』研究」（1941 年執筆。1943 年補筆）、『半獣神の午後 其他』、要書房、1947 年。

[56] 鈴木が主として留学中の 1926 年に収集した書籍類。現在獨協大学に寄贈されている鈴木信太郎旧蔵書には、オーバネルの詩集 3 冊（*La Mióugrano entre-duberto*, *Li Fiho d'Avignoun*, *Lou Rèire-Soulèu*）と戯曲 1 点 2 冊（*Lou Pan dóu pecat*）が含まれている。『獨協大学図書館所蔵 鈴木信太郎文庫目録』、獨協大学図書館、1997 年、281 頁。

[57] この論文は未見。

同じ頃である。

大学卒業後も杉は近代プロヴァンス文学の研究を続けていくが、1951 年の暮に思いがけずフランスと個人的な縁を結ぶことになる。かねて注文してあったオーバネル関係の書籍がフランスから届いたとき、その中の一冊に詩人オーバネルの孫エドワール・オーバネル（1901-1970）からの書簡が挟み込まれていたのである。オーバネル家は代々アヴィニョンで印刷・出版業を営んでおり、詩人オーバネル自身もこの職業に従事していた。孫のエドワール・オーバネルも家業を継いでいて、その関係で遠い日本に祖父の作品を研究している学者がいることを知ったわけだが、彼はこれをおおいに喜び、以後、オーバネル研究に必要な書物を数多く送って杉の研究を支援する。そして杉もその厚意に応えて着実に成果をあげていくのである。

畠中敏郎の「ミストラルとプロヴァンス語」が活字になった翌月の 1952 年 6 月、杉はまず日本フランス文学会の全国大会において「テオドール・オーバネルについて」と題する発表を行う。この発表の詳細は不明だが、その 3 ヵ月後に発表された「テオドール・オーバネル評傳[58]」を見ると、まず中世から 19 世紀までの南仏文学史とフェリブリージュの盛衰が概観され、次いでオーバネルの生涯および作品が詳しく紹介され、最後に「オーバネルの二面性」、すなわちキリスト教徒としてのオーバネルと芸術家としてのオーバネルの内面的葛藤が鮮やかに論じられている。なお、この「評傳」末尾の書誌では、多数の本に「Aubanel 氏より贈られた」という注が付けられており、研究を始めた頃は十分なテキストすら持たなかった杉が、アヴィニョンの友人の援助にどれほど多くを負っていたか、またそれにどれほど感謝していたかを見て取ることができる。

さて、オーバネルという地方語作家を研究対象とするにあたり、杉は論文の冒頭で次のように自分の研究の位置付けを行っている。

> 元来南フランスに発生したプロヴァンス Provence 文学といえば、フランスの文学史家ですらただ本来のフランス文学に関する範圍で極く簡単に触れているに過ぎない。しかしわれわれは、プロヴァンスが中世紀に百花りょう乱と栄えた吟遊詩人（トルバドール） Troubadour の文学を生み、全ヨーロッパの抒情詩発生に重要な契機と素材とを提供したこと、南仏出身の文学者及び作家に共通なオリヂナリテーがあること、更には比較文学が文学研究に必須な條件である事実などを考慮するとき、現在南フランスの一方言と軽視されているプロヴァンス語及びその文

[58] 杉冨士雄「テオドール・オーバネル Théodore Aubanel 評傳」、『岡山大学法文学部紀要』第 1 号、昭和 27 年 9 月。

学を研究することはあながち無益とも思われないのである[59]。

プロヴァンス語が方言として軽視されているのは事実だが、その文学の歴史的重要性は正しく評価する必要がある。またその特殊性・独自性を見極めることは、比較文学の貴重な資料を提供することにもなる、という主張である。日本初の近代プロヴァンス文学専門の研究者として、杉は慎重に自分の足場を確かめている。特に注目すべきは、杉がフェリブリージュと同時代のフランス文学との比較を行っている点である。フェリブリージュを語る際、彼等が拠り所とした中世のトルバドゥールに言及するのは定石であるが、同時期の仏文学との関係を探り、フェリブリージュの位置を見定めようとする視点は、杉以前の日本の南仏文学紹介者には明らかに欠けていた。

杉が先行研究を援用しながら述べるところによれば、オーバネルは若き日のかなわぬ恋を歌ったロマン派風の作品、すなわち第一詩集『笑み割るる柘榴』第 1 部「愛の書」に収められた作品群によって知られているが、恋を知る以前には純粋のレアリスト詩人として出発しており、同時代の中央詩壇の傾向と一線を画しているという。修道院へと去った恋人をかつて彼女が住んだ部屋にしのび、なつかしいその姿を今一度映してほしい、「Mirau, mirau, fai-me la vèire, / Tu que l'as visto tant souvènt. 明鏡(すがたみ)よ、明鏡よ、かくもかのひとを映したる / 君、かのひとを現(み)せしめよ[60]。」と鏡に呼びかける詩など数編の恋歌を引用し、あたかもミュッセのごとくとオーバネルを形容した後で、杉は次のように書く。

> しかし我々はこの「愛の書」の詩が所謂フランス浪曼主義のそれと、本質的に相違してゐる点に注目しなければならない。即ちオーバネルはラマルティーヌ Alphonse Lamartine（1790-1869）やユゴー Victor Hugo（1802-1885）の如く、醇美な夢想にたん溺することはあつても、現実を遊離して抽象の世界をさまようことはなく、又セナンクール Etienne Sénancour（1770-1846）やルソー J.-J. Rousseau（1712-1778）に見られる如き、自己分析に沈潜することも彼の性格としてあり得ないことであつた。それ故ドイツのプロヴァンス文学研究者ヴェルテル Nicolas Welter の指摘しているように、オーバネルはロワール Loire 河の彼方に開化した浪曼派或は高踏派の詩人に強い関心を抱いてゐたが、彼は飽くまでも南方フランス人に共通な現実直視の傾向を逸脱することはなかつたのであ

---

[59] 同上、77 頁。

[60] オーバネルの抒情詩集『笑み割るる柘榴 *La Mióugrano entre-duberto*』第 1 部「愛の書」第 12 の歌。なお、引用されている詩の中には、『海潮音』所収の「白楊」の原詩もあり、この作品だけは上田敏の訳詩が添えられている。

る[61]。

簡潔ながら、オーバネルを含む南仏詩人達をフランスロマン派や高踏派と対比し、彼らの作品の特色を的確にとらえてある。従来の紹介者が、フェリブリージュと近い位置にいたフランス語作家、例えばドーデやマラルメとの個人的なつながりにおいてのみこれらのプロヴァンス語作家達を扱い、仏文学のいわば周縁部に置いてきたのに対し、杉は最初から彼等を 19 世紀フランスという時代と空間の枠に入れ、フランス語の文学と共存しながら独自の一派を立てている文学者群として提示しているのである。

1952 年のこの論文で、フェリブリージュと同時代文学との横のつながりを概観した後、杉は改めてトルバドゥール以来の文学的伝統との縦のつながりに目を向け、1954 年から 1955 年にかけて中世南仏文学をテーマとする複数の論文[62]を発表していくが、こうした業績が認められたものであろうか、1955 年には、『世界詩人全集第三巻 後期ロマン派詩集』の「フランス詩篇」に、ボードレールらの詩と並んで、ミストラルとオーバネルの詩 3 編が収録されることになった[63]。いずれも杉がプロヴァンス語から直接訳したもので、これらの詩人達の作品が初めて紹介された『海潮音』の出版 50 周年の年にふさわしい、記念すべき訳業であった。

内藤濯の解説によれば、『後期ロマン派詩集』にフェリブリージュの作品が加えられたのは、「パルナス同人と時代を同じうした故をもって」であり、「パルナス同人の詩が造化の美しさを思わせるなら、これはまさに、南國の明るい日ざしのもとに咲いた野の花」であるという[64]。フェリブリージュの政治的側面を完全に消し去ったこの記述はやや単純化されすぎているきらいもあるが、近代プロヴァンス文学が同時代のフランス語文学とともに、曲りなりにも正式にフランス文学の一部門として扱われている点で、ここまでの

---

[61] 杉「テオドール・オーバネル Théodore Aubanel 評傳」、80-81 頁。

[62] 「吟遊詩人 Troubadours とギョーム Guillaume 九世」、『岡山大学法文学部紀要』第 3 号、昭和 29 年 3 月；「吟遊詩人セルカモンの場合 ―生涯と作品について―」、『岡山大学法文学部紀要』第 4 号、昭和 30 年 3 月；「ジョフレ・リュデルについて ―史実と創作」、『フランス文学研究』（日本フランス文学会）、昭和 30 年 6 月。

[63] 『世界詩人全集第三巻 後期ロマン派詩集』、河出書房、1955 年、60-62 頁。杉によれば、この本に訳詩を載せられたのは「井上究一郎先生の御好意によって」だという。なお、その井上究一郎は、村松嘉津の『プロヴンス随筆』を「世界にも比を見ない美しい『地中海の霊感』の書」だと高く評価していた。（井上「名著発掘」、『文藝』第 7 巻第 6 号、昭和 43 年 8 月、61 頁。）

[64] 引用部はいずれも『世界詩人全集第三巻 後期ロマン派詩集』の「解説」、337 頁。

杉の努力は報われたといえる。

『後期ロマン派詩集』のフェリブリージュ関連箇所を具体的に見ていくと、作者に関する解説には、代表作の紹介のほか、例えばミストラルが中央集権に対抗して連邦主義を唱えたこと、政治色を強めるフェリブリージュからオーバネルが脱退したことなど、文学活動以外の伝記的要素も盛り込まれている。また解説の末尾には、「（本譯詩はプロヴァンス語より。）」という注が添えられている。訳出されている作品は、ミストラルの「やがてきたらん」と、オーバネルの「おお、さはれ 小部屋こそ」「そよかぜによせて」の計 3 編で、「やがてきたらん」と「おお さはれ 小部屋こそ」は抄訳である[65]。

これらの作品はいずれも上品な美しい日本語にうつされており、ことに全訳されている「そよかぜによせて」は、「若葉もえいで うちふるふ / 思ふまにまに ふく微風よ / 吹け 吹け いとしきひとのかた / 森のささやき はこびゆけ[66]」というリズミカルな七五調が快く、原詩の軽快な調子を保ったみごとな訳詩である。また、第一節のみが収められた「おお、さはれ 小部屋こそ」は、実は先に論文を紹介する中で引いた「明鏡よ、明鏡よ…」の詩で、こちらも原詩の趣を伝える美しい訳文に仕上がっている。

ただ、ミストラルの「やがて きたらん」については、翻訳そのものではないが、省略の仕方にいささか疑問がある。この詩は、「けふといはずも あすならん」という一行が各節の最初に置かれ、忍耐強く待っていればなにごとも必ずよくなる時が来る、忍耐こそが智慧の支柱だ、と説く詩人晩年の作品で、全 9 節から成るが、『後期ロマン派詩集』ではそのうちの第 4〜7 節が省略され、末尾が次の 2 節で締めくくられている。引用に原詩を添えよう。

けふといはずも あすならん。	S'acò's pas vuei, sara deman :
ふかき悩みの 悪しき法	En un desbord de lèi marrido
時たつままに 除かれて	Pèr fes lou mounde se desbrido ;
時くるままに 天命に	Mai, vèngue l'ouro, à soun coumand
まがれることの 從はん日は。	Diéu giblara li sacamand.

---

[65] 「やがてきたらん Veguen veni」は『オリーヴ摘み *Lis Oulivado*』所収。「おお さはれ 小部屋こそ Ah ! vaqui pamens la chambreto」「そよかぜによせて À l'Auro」はそれぞれ『笑み割るる柘榴 *La Mióugrano entre-duberto*』『アヴィニョンの娘たち *Li Fiho d'Avignoun*』所収。

[66] 『世界詩人全集第三巻 後期ロマン派詩集』、62 頁。引用部の原文は以下の通り。
« Lou fuiage nais e tremolo ; / Auro, tu que vas ounte vos, / Vers moun amigo volo, volo : / Porto-ié lou murmur di bos. » Théodore Aubanel, *Œuvres complètes*, t. I, Poésie, Avignon, Aubanel, 1960, p. 224.

けふといはずも あすならん。	S'acò's pas vuei, sara deman :
狂へる奔流 しづまりて……	Lou gaudre foui cour à la baisso…
おおひとびとよ、あらぶとも	Basto qu'après lou boui-abaisso
うらみとはせず いにしえを	Noun regreten, pàuris uman,
よろこび満ちて かへりみん日は[67]。	Dóu vièi passat lou tèms charmant !

達観して時の流れを見守る長老の風格と余裕とは感じ取れるが、前の数節が削られているために、意味がとりにくい。ちなみに前節（第 7 節）の大意は、「今日でなくとも明日であろう。フェリブリージュとその詩人達が称えられ、我等の陽気なロマンス語がフランス語に羨まれるようになるのは」というもので、こうした詩句の後に続いてこそ、いずれ悪しき支配は除かれる、そのときになって「昔はよかった」と後悔せずにすむように（我々の文化を守っていこう）、という第 8 節・第 9 節に示されたミストラルのメッセージは伝わるのではないだろうか。この省略が訳者自身によるものか、あるいは紙幅の都合で編集の際に行われたものか、その経緯は不明だが、惜しまれる欠落というほかない。

それはともかく、1955 年の暮、杉はミストラルとオーバネルの訳詩が載った『世界詩人全集』を、数年来の友人である詩人の孫エドワール・オーバネルに贈った。これに対してエドワール・オーバネルは、詩人オーバネルの作品とその翻訳とを併載した書物を出版してはどうかと勧め、この提案を真摯に受け止めた杉は、以後数年間、フランスの学者達とも連絡を取りながら研究を進め、計画の実現へと向かっていく。畠中敏郎がアヴィニョン国際学会に出席して世界の研究者達と交流を始めた頃、杉冨士雄はこうして個人的にフランスとのつながりを深めており、まもなく畠中とともにフランスの研究界に向けて積極的に発言するようになっていくのである。

結び

本稿では、戦後の 10 年間に近代プロヴァンス文学の研究・紹介に取り組んだ 3 人の学者、村松嘉津・畠中敏郎・杉冨士雄の足跡をたどった。戦前マルセイユ近郊に暮した村松はその体験を生かして綴った随筆において、「地中海文化圏」の中にプロヴァンスを位置づけ、その文学をもラテン文化とい

[67] 同上、61 頁。原文引用は Frédéric Mistral, *Lis Oulivado*, Raphèle-lès-Arles, C. P. M. Marcel Petit, 1981, p. 124 に拠った。

う広がりの中に置いて、地方文学という狭苦しい印象を拭い去った。これに対して、畠中はミストラルらの運動が後世に及ぼした影響に興味を抱き、同時代のフランスの動きにも注意を払って第一回南仏語南仏文学国際学会への出席を果たし、杉は卒業論文から一貫してオーバネルの作品や南仏文学史の研究を進めて、フランス文学史の中にプロヴァンス文学を正しく位置付け、また近代プロヴァンス文学の直接訳数編を世に送るに至った。

これが 1955 年の日本における近代プロヴァンス文学研究の状況だったが、本国フランスと肩を並べたとまでは言えないものの、わずか 10 年の間に相当な進歩を遂げたのは確かである。ちなみにオーバネル研究についていえば、この詩人の作品の中には 1940 年代半ばにようやく完全な形で日の目を見たものもあり、本格的な研究が可能になったのは第二次大戦後、オーバネル書店から全集が出版された 1947 年以降だった。その意味では 1946 年末に研究を志した杉は実にいい時期にスタートを切ったといえるのである。

さて、1955 年以降も杉はオーバネルを中心に手堅い研究を続け、1960 年にはそれまでの研究成果の集大成である『南仏抒情詩人テオドール・オーバネル』を刊行する。このとき畠中は書評でこの著作を取り上げ、杉の多年にわたる努力に、自分も「その経過をもいくらか知っているだけに、心から尊敬と讃嘆とをささげる[1]」と述べているが、畠中自身も着実に比較文学的な研究を進めて、1961 年からは南仏語南仏文学国際学会での研究発表を始め、また一時期は勤務先の大阪外国語大学で近代プロヴァンスの言語・文学の講義も行っていた[2]。

翻訳については、杉が『南仏抒情詩人テオドール・オーバネル』において、かなりまとまった量のオーバネル作品の直接訳を公にすれば、1961 年にフランスから戻った村松も、翌年から『文学散歩』誌上でプロヴァンスのコントの連載を始め、やがて畠中もミストラルの「ナルボンヌの蛙」など数編の短編の翻訳を発表し始めて、3 人の競演は続いていくのだが、この時期の近代プロヴァンス文学研究の動向に関しては、彼等の翻訳の特色や問題点をも含めて、また別の機会にまとめることにしたい。

---

[1] 畠中敏郎「書評：杉冨士雄著『南仏抒情詩人テオドール・オーバネル』(大修館・1960)」、『フランス語研究』第 24 号、日本フランス語学会編、1960 年 6 月、25 頁。

[2] *Revue de langue et littérature provençales*, N° 2. Panorama des études d'oc, Avignon-Paris, Centre d'études et de culture provençales, 1960, p. 53.